



ウルトラマンと金光大神

部長 大林浩治

ご存じのように、科学特捜隊のハヤタ隊員はウルトラマンに変身する。詳しく言うと、ハヤタはウルトラマンに寄生されたのだった。ハヤタは、人をこえた生命、超人為的な何かを抱える。ウルトラマンを抱えて暮らすハヤタの心中はどうだったのだろうか？

小さい頃からの問いは、先の論文(『覚書』『覚帳』の神語り世界)での「金光大神」に向けた問いに通じることになった。神から届くメッセージも超人為的な何かだから、ポイントは同じである。幻視的・幻聴的感覚に包まれた暮らしとは？ 物質世界の背後に非物質的意志・気配を感じ取る感覚とは？ 神から世界があることの謎を知らされる。しかしそのことは同時に、根源的不安を呼び覚ますこととしてあつたような発心の原初の感覚を伴う。それは理屈の世界が排除した狂いの世界だろう。では、この世と別の神語り世界、心的状態に圍繞された生き方とは？

研究的に言おう。これは(人間-金光大神)論が排除してきた問題である。これまで「人間と

しての金光大神」は語られてきた。しかし、「金光大神を生きる人間」の問題、心的状態は問われなかった。(人間-金光大神)で念頭に入れている「人間」はどちらかというと健康的で常識的だ。しかし「生神金光大神」として考えている、(金光大神-人間)の心の奥底、闇の部分を組み入れられなかったのである。

さて、ウルトラマンの話。第一話「ウルトラ作戦第一号」では、ハヤタを宿主とするウルトラマン寄生の由縁が語られる。あるときハヤタの飛行機と赤い球体(ウルトラマンの乗った、M78星雲の宇宙船)が接触事故を起こす。ウルトラマンは責任を感じたらしい。「申し訳ないことをした。ハヤタ隊員、その代わりに私の命を君にあげよう」。こうして地球平和のための怪獣退治の物語が始まった。(ちなみにウルトラセブンはまったく違う。宇宙人セブンは、モロボシ・ダンという人間に化けただけ。しかも、地球を守る理由はいっさいあかされない。)

(人間-金光大神)論からは、こういった問いが発せられる。ハヤタは、いかにしてウルトラマンなる寄生体を自家薬籠中のものとしたのか？ 一方、(金光大神-人間)論は、こう問う。ウルトラマンでいる時にハヤタの自我はどうあるのだろうか？

怪獣が暴れ出す。なんとハヤタは、隠れ場所を探してコソコソし、適当な場所を見つけてはウルトラマンに変身するのだった。ウルトラマンになるには、どこか後ろめたいのである。コ

ソコソしているとき、彼を支配しているのは誰の自我か？ ウルトラマンか？ ハヤタか？

おそらくウルトラマンの命令(「早く戦え」)に支配されたハヤタの自我は、コソコソの態度に認められる。しかし怪獣と直接戦ったことなどないハヤタの自我は、変身すればかき消されるほかない。建造物の破壊状況をみればわかる。怪獣退治に人間的自我など働く余地はないからである。これは憑依の問題である。自分ならざる何かを取り憑く。自身にとってウルトラマンとはこうだと明言できない事態である。

一方、コソコソ隠れて変身する姿には、ウルトラマンを抱える人間の暮らしを見る思いがする。ウルトラマンが我が身を隠す理由はない。隠す理由は人間の都合が働くハヤタにしかない。ウルトラマンという事態を抱えて生きねばならぬ、この不可解さはどれほどのことだったろう。抱えた当事者の説明を超えた不可解は不安以外の何ものでもない。一種の抑鬱の心的状態を招きましょう。狂気を前にした人間だといってもよい。なにしろ怪獣を見て、いたたまれず発心するのだから。

「お知らせ」に生きる人間の暮らしはどうだったろうか？(金光大神-人間)論は、狂気など、表象不可能なことがらを不可能だからといって否定や無視をし、あるいは役に立たないとした上で捉えてきた、信心、生活、人間のあり方を問うものだったのである。

(兵庫・出石教会)

今年も だこぽち

研究所は、今年も研究生三名を迎え、新しい研究年度を出発させることが出来ました。今年度の取り組みから、主なものを幾つか紹介したいと思います。

〈日韓宗教研究FORUM〉

今年の取り組みの大きなものとしては、何と云っても八月二〇、二一日に開催予定の「日韓宗教研究FORUM第四回国際学術大会」が真っ先に挙げられます。ご承知の通り、この会合は一九九三年に始まった「日韓宗教研究者交流シンポジウム」が二〇〇〇年に「日韓宗教研究FORUM」へと改称し、今日まで続いているものであります。本所では、一九九四年にも一度受け入れ団体となっており、それから数えて一三年ぶりの受け入れとなります。この度は、前回より大会規模も大きくなっていることもあり、主会場として浅口市民会館金光(旧金光町民会館)を使用します。これから大会本番に向けて、本部当局をはじめ、浅口市などからのご理解、ご協力も得つつ、職員一同力を合わせて取り組んで参ります。なお、これに向けての準備を昨年度来進めてきており、その一部を「沖縄見学調査報告―悲しみとその痛みの経験が導く、信心の理由―」として本号に掲載しておりますので併せてご覧下さい。

〈第二回教学に関する交流集会〉

日頃、研究所は「お山の上」と呼ばれ、日常とは隔絶した世界にあると思われる向きもありますが、研究所では各種の会合を通じて、教内あるいは教外の方々との問題意識の交流を心がけています。この会合は、研究所あるいは本部に人を招くというのではなく現地に飛び込んで行って、教学研究者の意識や研究の意義をご理解頂き、また、教学研究者に対するご意見、ご要望を頂くべく、昨年からの新たに始めたものです。第一回は、東近畿教務センターのご協力を得て、同センター会議室を会場に開催し、約四〇名の参加がありました。今年第二回の会合を、四国教務センターのご協力を得て九月に開催する予定となっております。

今年、例年よりも一ヶ月早く、六月五、六日に開催いたしました。今回は新たな試みとして、これまで研究所で行ってきた調査の実際に触れることを願いとし、邑久光明園への調査見学も併せて実施しました。

★

この他にも、布教功労者報徳祭時に紀要論文を題材に実施してきております「教学講演会」を、今年からは立教一五〇年に向けて教団独立記念祭時にも本所OBを講師にお招きして実施します。また、引き続き資料の収集・管理をはじめ、研究者の育成にも鋭意、その方途を講じて参ります。

こうした事柄に取り組みながら、なお一層、時代状況を見据えた課題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えています。

平成19年度研究題目

- 【第1部】
 - 所員 加藤 実
 - 金光大神における場所の経験―「此方地内」をめぐる―
 - 所員 高橋昌之
 - 広前の様相
 - ―金光大神および金光宅吉の時代の「大本社」を中心に―
- 【第3部】
 - 所員 大林浩治
 - 「教団」思考の転調について―1960年代の動向をめぐる―
 - 所員 児山真生
 - 神道金光教会時代の教区、講社の展開状況
 - ―「管長家資料」からの教区抽出作業を中心に―
 - 所員 宮本和寿
 - 金光教の震災経験―「阪神・淡路大震災」を中心に―



「信じる」ということ

研究員 橋高真宏



世の中には疑ってかからなければならぬことが沢山ある。政治、経済、宗教、マスコミ、医学、科学、牛肉、鳥肉、スピリチュアル……。言い出したらきりがない。はじめから怪しい臭いのもあれば、今まではよしとしていたものが、そうではないということに気付く事もある。そういう「疑う」ということを意識的にもまた無意識にも行っている中で、「信じる」ということはどのようにしてできいくのであるかと思う。

先日ある信者さんに話を聞いた。その方は四十代の女性で、父と二人で暮らしていた。そして、願いのままに土地を求め家を建てることになる。彼女の父は教会に来て、「娘のために小さくいけれど家を建てる事にしました。つきましては家の中心に神様をお祀りしたいので、天地書附を書いて下さい」とお届けし、持ってきた木の板を差し出した。「それはよかったなあ」とその板に天地書附を書いて神様にお願ひし、お下がりました。建築も順調に進み、ログハウス風の家が出来上がった。あとは細かいところを調べて、外回りをすれば完成であった。

まもなく入居できるとある日、父は完成間近のその家に行き、日曜大工でイスを作ることにした。新しい家での生活を描きながら。

夕方になり娘は会社から父の携帯に電話を入れた。出てこない。しばらく時間を置いて又電話した。出てこない。なにかあったのではないかと心配になり、急いで新しい家に向った。家の前には父の車があるが、室内には電気がついていない。あわてて家の中に入ってみると、父は仰向けになって家の真ん中で倒れていた。急いで救急車を呼んだが、すでに息を引き取っていた。力が抜けた。

葬儀も無事終った。あつという間の出来事を夢の中のこのように感じていた。父が亡くなってから思っていたことは、「二度とあの家には行きたくない」「父が亡くなっていったあの家には住めない」という思いであった。

そんな中、葬儀に来ていた姪が「大阪に帰る前に一度新しい家を見てみたい」と言い出した。自分は行く気になれないと言ったが、まわりの者が「住む住まないは別にして、一度行ってみたら」と強く言うので、しぶしぶ姪を連れて新しい家に向った。父が亡くなった家である。いろんな思いを込めて建てた家である。神様にお願ひして建てた家である。それなのにどうしてという思いが、家に向う道中、心の中に浮かんできく。

家に着き部屋に入り、父の倒れている姿を鮮明に思い浮かべながら、その時の状況を姪に話して聞かせた。その姪は小さい頃から靈感があ

る。何かを感じるように部屋を歩いてみて、「おじいさんはここで倒れていたんだね」と言いながらその場所で横になった。「おばさん、ここだけずごく暖かいよ。何かに包まれている感じがする。……上にあるあれは何？」父が倒れていた場所の上を見上げると、吹き抜けの天井の梁に、教会で書いて頂いた天地書附が掲げられていた。姪に「神様をお祀りしてるの」と説明すると、姪は「それでこの場所だけ暖かいんだ。おじいさんは神様に守られていたんだね。気持ちよかったですよ」と言った。

この姪の言葉で自分の心が変わった。父は神様に守られていたんだ。この家で父と一緒に住むことはできなかったけれど、神様が一緒にいて下さる。そして父が霊として一緒にいてくれる。確かにその実感があつた。この家で父と一緒に住んでいこう、その時決心した。

信心するとはどういうことかと思う。どういうきっかけで信心になるのかと思う。今起きている局面を切り開くもの、その信心とはなんなのかと思う。神に心がグツと向かう、その時に現れている働きは言い表し得ないような働きである。心の持ち方だけではない、ありよう全てを包み込む働きに接した時、いのちが響き「信じる」ということが出来てくるのであるか。疑ってかからなくてはいけなくなつた沢山の物事を前に、虚構に惑わされず、足元にあるものをしっかり見つめ大事にしていきたいものである。

(島根・浜田教会)

★平成一八年度研究報告★



【参加者】

宮本和寿、高橋昌之、秦修一、
岩崎繁之、佐藤道文
(司会)島田悠香

(司会)今年度の研究報告では、資料を中心に扱うものが多かったと思います。そこには、資料に対する見方に何かこれまでとは違った問題意識が刻まれているのかもしれない。今日の座談会では、そのような意識が何を示しているのか、今後の研究の展望にあわせて、話し合えたいと思います。

(秦)今年の研究報告の中で、「風土」という言葉が多く使われていました。なぜ「風土」がキーワードとして見られるのでしょうかね…

今、金光教内とか教外とかいう分け方にはどういう意識が関係しているか、という問いが、研究者の中に生じてきてますよね。その問いが、風土を考えさせているように思います。土地などの問題にみられているのは、それぞれの風土の側から金光教の信仰を明らかにしているというものでした。

(宮本)金光教を土地の信仰風土や文化などから

捉え直していこうというような動向は確かにあります。そのことは、資料の見方が金光教でそれを見るところから、金光教をそれで見るという意識の反転となっておりますね。

(佐藤)児山報告(「地域における経済・生活秩序の変容と信仰受容の諸相」)のおもしろい発想はそうですね。土地柄から信仰受容のあり方を見るなんて。地域が神様をどう受け容れるかという様相が述べられていました。

(秦)児山報告では講社に加入していた人々の名簿を扱っています。それを見る見方は金光教の組織の問題として講社を見るのではなく、地域の人が求めていた信心とはどういうものか、という見方になっていたと言えます。

(高橋)あたり前に考えていることに疑問を持った、本来性を考えたりしていると、同じ資料を扱っていても見えるものが変わってきますよね。

もう一つ資料から考えさせられるということがあると思うんです。ぼんやりしていて、じっくりこないなということがあって、資料を見てはつと問題意識が変わるといふような。

岩崎報告(「金光大神の時間認識―『新』『旧』『末』三通りの日付に見られる付け分け行為に注目して―」)もそうだと思う。今まで注目されてこなかった「付分帳」(新暦・旧暦・末暦の三通りに付け分けられた帳面)を対象にしていますが。

(岩崎)これまで主として「覚帳」にある「先を樂しめ」という記述から金光大神の信仰姿勢について考えてきました。ところが、「先」や「末」、

「何年先」とあって、一体それが何を表しているのかが読めない。それで、個別の記述ではなく、そもそも「覚帳」とは、どのような帳面なのか、その全体から見直そうと思ひ、原典を見ると、明治一三年と一四年の間に「付分帳」が挟まれていたことに改めて気づいたんです。それまでも、金光大神が新旧末の日付を使用しているのは知っていましたが、特に疑問に思わなかった。でも「付分帳」が挟まれていることによつて、実は金光大神自身が新旧末の日付に最も疑問を抱いていた人物ではなかったかと思えはじめたんです。お知らせと現実との間で戸惑っている人だ、というような。そこから、時系列で事蹟を追うのでは見えないものがあるんじゃないかと思つたんです。日付なんて当たり前のようには思うけれど、一体日付って何を表しているんだろう。それで、「付分帳」って一体何だろうと考えることにしたんです。

(佐藤)「付分帳」への注目は、分からなさをも受容しようとし、その分からないものへ取り組んでいくという意味で、ものすごく積極的ですよね。結果として分かる分からないを超えた問題提起になるのではないのでしょうか。こうなんだ、と明言することではない分かりますが、またそういう分かります方の楽しさがありますね。

(高橋)今まで事実を読もうとする態度がずっとあったと思いますけど、しかし、そういうものなのかどうかってことですよね。教祖自身も分からぬままに書きながら、書くことによつて数字の並びに、何か見えない大きな秩序の痕跡の

ようなものが浮かび上がってくるんじゃないか。今まではそういう分からないものを受け付けないこちら側の態度があったのかもしれない。

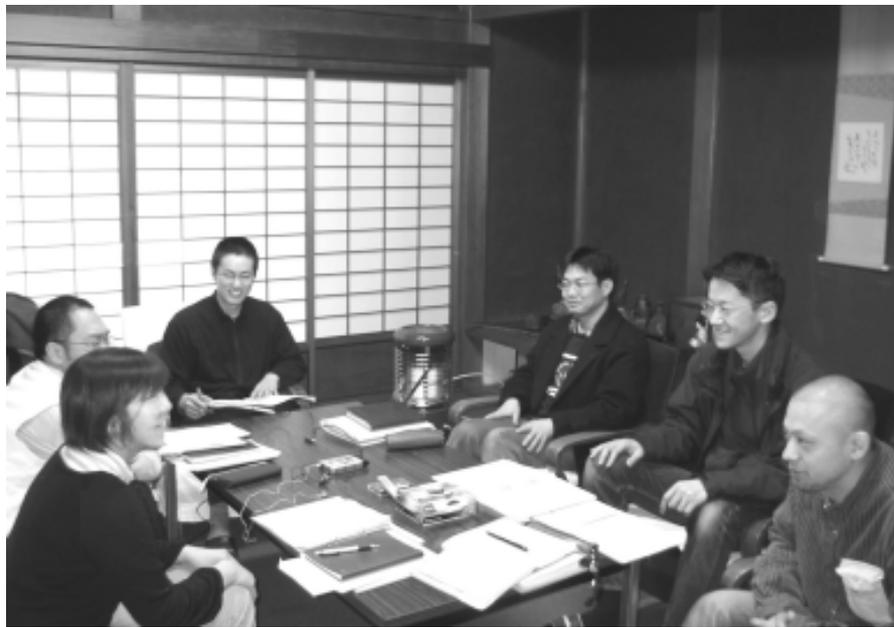
(佐藤)今までの蓄積の中で、そういうことを問題にさせられる時期がきているのかなと思います。それは、信仰イメージがいい意味で崩されていくということかもしれません。正しいものとか、あるべき姿といった判断が全てでなし、それでもって社会に問いかけるといふよりも、それぞれに自分のあり方に問うていく。問題とする対象物が、問題を問題とする構えの方へ示されることになっていくから、問いが自分にも問われると同時に、開かれた問いとしての提示になっていくと思います。

(司会)自分の信仰イメージを崩すというのは、前提や枠組みを自らが取り払っていくということでしょうか。

(岩崎)例えば、金光教がなぜあると言えるのか、広前がなぜあると言えるのか。人にそれがあるとして伝えようとする、逆に、実際どうそれがあのかと、自分の意識の問題としても問わせられますよね。その時、イメージされてきたものが崩されると同時に豊かな発想が生まれてくるんじゃないか。

(宮本)それと関わっていますが、私は信仰を求めらる方、意味付けのあり方がこれから問題になってくるのかなと思います。というのは信仰を求めたいというものが人間の主体的な意識の中で持たれるという面と、人間の身体をすり抜けたところからの欲求によって、逆に人間が

動かされるといふ面もあると思えるからです。そこから信仰を求める意識を対象に据えることができるのではないのでしょうか。欲求をどう



収めていくかという問題ではなくて、収めきれない欲求の対処を問われる人間が、どう助かりの世界に誘われるかということを考えていきたいですね。

そうした時にクローズアップされてくるの

が、意味付けていくあり方としての人間の問題になってくると思います。私は今回、信奉者の発言に注目しましたが、信奉者の主体意識を立てて見ようとしていたら聞えなかつたろうと思っています。

(秦)宮本報告(「金光教の〈戦後〉とは―信心体験談・「おかげ」話に注目して―)で研究対象としているのは、戦後に生きた人たちです。ね。敗戦という経験によって全てが失われたような気持ちにもなる、どうしていいのかわからないというところから求める。そういう断絶からもう一回結び付くという力が生まれてくる。それが信心を表現する行為に結実していつているのかなと思います。

(司会)ここまで話してみても思うのは、今まで積み重ねられてきた実証研究は、資料の内容に即して実証を試みたものであると言えますね。それに対して今の動向は、資料のあるところで実証するばかりでなく、資料には直接に表現され得ない次元から、経験のリアリティーに即した見方を資料実証と共に示すことを試みていると言えらるでしょう。それは資料の限りでしか実証し得ないとする閉ざされた実証主義の陥りやすい問題をいかに克服するかの問題だと言えます。資料は、資料自体との対し方も含めて現在の私たちの意識を問うものであることも理解できたように思います。

(平成一九年三月二九日に実施)



日韓宗教研究FORUM・沖縄見学調査報告

幸せに満たされて生きていきたい。人はどれほどそのための努力を注いでいることか。それは逆に、幸せに生きることがはかなく、こわれやすいことも意味している。そのこわれやすい『生』へ光をあてる神への祈り、願いは、時に常識をも後ずさりさせるほどに、格別な強さを持つているといえる。

このような思いをいつそう深くさせられたのが、「日韓宗教研究FORUM」(昨年12月21日～24日)で行った沖縄での見学調査である。戦跡や宗教施設を巡る合同調査・見学を行い、また「いたみとアートの可能性」と題したトークセッションを行っている。以下は、その調査の簡単な参加記である。

見学では沖縄最高の聖地「斎場御嶽(セイファールウタキ)、沖縄戦死者の名を刻む『平和の礎』や韓国人慰霊塔をまわり、また沖縄土着の教団「生天光神明宮」の儀式も拝ませてもらった。

また「沖縄戦没者墓苑」(遺骨を納めている国立の墓苑)では、民間巫者・知念ヨシ子さんに



生天光神明宮拝殿



知念ヨシ子さん

よる慰霊があり、沖縄市泡瀬の御嶽では、民間巫者・兼島文子さんの平和祈願をいただく。

民間巫者のことを沖縄では、「ユタ」と呼ぶ。しかし本人は自分をそう呼ばない。蔑みのニュアンスがついているからである。運勢判断、祖先の祈りの仕方、死者の霊の口寄せ、病気治しなどを行う巫者は、ほとんど女性。巫者になる過程で様々な人生の苦難の体験が重なっているという。県民の4人に1人が命を奪われたという沖縄戦は、巫者になる彼女らに大きな影響を及ぼしているのである。

この調査を企画していただいた佐藤壮広さん(恵泉女学園大学、立教大学他非常勤講師)によると、「神事(カミゴト)」の道を歩む人には、戦争体験の苦しみに結びついた生活にあつて、「平和を祈れ」との神の声を頂かれた人が多いという。未だ眼前にある基地の重圧が、戦争で死んだ者の苦しみにも重なって、自身の身体に痛みや症状となっている方がおられるという。

生天光神明宮の光主・渡嘉敷シズ子さんも、内地の大阪で大空襲の被害に遭い、気を失う中で

「お前が死んだら琉球は絶えてしまうぞ」との神の言葉を聞いていた。沖縄に帰ると、強い「神ダリーイ(神懸かり)」に逢い、その中で「生天光神」の神名が知らされたと言ってくれた。

「沖縄のお年寄りは、死ぬ前になると、戦争の話を出すんです。そう語ってくれたのは、「痛みとアートの可能性―『痛み』の臨床と精神文化の諸相を知る」と題したトークセッションにゲストスピーカーで参加された現代美術作家の花城郁子さん。「日頃、戦争のことは何も言わなかったお年寄りでも、そうなんです」と。この花城さんの作品に一貫しているモチーフは「祈り」。セッションでは、自身の作品を紹介し、こう語っていた。「沖縄では、日本兵の幽霊が出たという話はありません。ひよつとして米兵の幽霊が出ると、長い沖縄戦が終わるのじゃないか」。

精神科医の稲田隆司さんは、壕の中で神懸かりにあつた人の話を紹介。「極限状況での神懸かりは、とかく『トラウマを背景にした解離、人格転換』として解釈しがち。でも、魂の危機に置かれた人間にとって、神懸かりは、戦争の圧倒的な力の前には無力かもしれないけれども、状況の



兼島文子さん

- 悲しみと、その痛みを経験が導く、信心の理由 -

花城郁子「終わりの記憶」

1944年、米軍が使用した水筒、ポインセチア、海外からのハガキなどを使って、戦争で「これがあれば死なずにすんだのに」という、死を生きる方向に見ようとする画像

(作品に対するご本人のコメント)



転回をはかろうとする懸命な営みだった。その転回の試みはいまも連綿とある」と。

トラウマの解き方は、韓国における「恨プリ(「恨」を解くこと)」と異なるのかもしれない。韓国側からは、「痛み」を与えている原因を明らかにし、取り除くべきだ」との意見。それに對し、地元の紳士からは、「沖繩にとつて基地の存在そのものが『痛み』。決して取り去ることができない。沖繩はそれを『痛み』として甘受しながら生きてきた」と。

このような発言の数々は、戦争で蒙った『痛み』、いまだ傷を残す現実が見せるはかなさの内側に、弱い人間を支えるしなやかな強さがあること、またそこに信心が介されていることを感じさせてくれたのだった。

これはおまけだが、花城さんは、おもしろい話を聞かせてくれた。「あのね。これまで沖繩では、認知症、老人ぼけって、あまり言わないですよ。「え、じゃあ、なんて言ってたんですか。「うちのおじいちは、カミンチュ(神人)になったって。そう言うんです」。

病氣も文化が作る。しかし、その問題をいとも簡単に超えていけるのは、これまた見えない世界を感受する文化の問題でもある。そしてその文化をささえる信心世界の広がりには思いは及んでいった。今夏の大会は、この時の企画会議を反映して下記の内容で行われる。



参加者集合写真

日韓宗教研究FORUM

第4回国際学術大会

テーマ

東アジア宗教研究の新展望
～「東アジア宗教文化学会」の発足に向けて～

☆日時 8月20日(月) ～21日(火)
△22日(水) 調査見学

☆場所 浅口市金光公民館

○基調講演

・桂島宣弘(立命館大学文学部教授)

「東アジア人文学の可能性を求めて」

・姜敦求(韓国学中央研究院教授)

「東アジアの神話・宗教・民族のアイデンティティ」

○セッション別研究発表・パネルディスカッション

・Aセッションー民俗社会と宗教

・Bセッションーポストコロナリズムと宗教

・Cセッションー現代社会と宗教

○記念特別講演

・金勲(北京大學外語學院日本語系教授)

「宗教と現代中国」

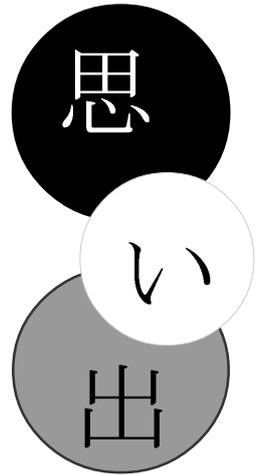
☆その他

○小川洋子氏を囲んでのトークイベント

○ヒーリングコンサート

○花城郁子氏による作品設置

○調査見学



研究所時代の思い出

美伯教会 松田敬一



過日、日課として運動と
しての散歩の途
中、久々に教
学研究所まで足
を運んだ。前庭
には乗用車が7
台、裏庭には7台駐車してあった。我々の
時代には目にするのができなかった光
景である。客殿の北側には、「教学研究
資料庫」が建っていた。この建物は我々の
時代には存在していなかった。

私が研究生となったのは、昭和39年の
11月であり、その後、助手になり、昭和
42年から一年間休職して、本部派遣の留
学生としてシカゴにあるミッドビル・ロ
ンバード神学校に留学し、帰国して昭和
44年に所員の任命を受け、昭和46年の7
月に本部教庁に移った。私は三代金光様
が「帰幽になった翌年に教学研究所に入
所したが、その後、高橋正雄先生は、昭

和40年に、大淵千俣先生は、昭和46年に
それぞれお亡くなりになり、巨星墜つ
感を深くした。教団においては、教主代
替わりを迎え、教学研究所においては、
所長代替わりを迎えていた。研究所の激
動・変革の時代に、私は研究所に身を置
かせて頂いていた。よき先輩や同僚や後
輩に恵まれていたことは、幸せなこと
であった。

研究の面では、浄土真宗の根本思想で
ある「悪人正機」(悪人こそ阿弥陀仏の本
願に救われる対象であるということ)な
どから見ても、宗教においては、見限ら
れるような人間こそ救われるべきではな
いのかという問題意識から、「見限った
女」に関する事跡の解釈に関心を抱いて
いた。当時は、追体験的研究の重要性が
強調され、研究者自身の生きる姿勢や研
究者が抱えている日常的な諸問題と無関
係に、単に客観的な研究を進めればよい
という状況にはなかった。そのためある
時期には、高橋正雄先生が提唱された
「見る事みること自分を見る事」という
態度で日常生活の中で、心にうごめく自
分の欲の諸相を見つめることに取り組ん
だこともある。

このたびの思い出も審らない原稿執筆の
依頼を受けて、改めて、遠い日に、信心
の自己吟味としての教学研究とはどのよ
うな研究なのか、教学研究は教会布教の
現場や社会・世界にどのような意味や働

きをもつものなのかを暗中模索し続けた
研究所生活を懐かしく思い起こした。

(元所員)

あんなこと、こんなこと

新田教会 小関照雄



表題は、あんな
こともあつた、こんなこと
もあつたとの
意。尚、多少の記
憶違いはご容赦
願うとして、そ

の①。当時の福嶋所長が女子マラソンを
見ていて「女子が走るのにマラソンとは
これ如何に」と奥様に宣わたったか。これ
を学院教学コースで披露されたのは主査
の藤井喜代秀先生であるが、コースも終
盤に近づいた頃、突如その藤井先生から
「男子が走つてもカインソウと言いが如し」、
これでどうじゃハツハツと言つたもの
笑いを交え、貴重な朝のお話を一同承つ
たのである。これが丁度研究報告執筆
真つ最中の時期。この忙しいのにと分
かつちやいるが、それでもこたわってし
まうところが研究者の面目躍如なのかも
それに触れ得た入所前の一コマである。
その②。たまたま所内で回文が話題に
上ったことがあつた。翌日、早川先生がオ

リジナルの超回文を作つてみえて披露下
さつた。駅前のエンパイアがどうかとか
玉島のスナックが登場したりと、かなり
長い文字通りの超回文で、なんと一過性
の話題のためにここまで労力を費やせる
とは。まさにその執着力が研究者の研究
者たる所以なのかも。いやはや脱帽以外
何ができませんよう。

その③。これは私が茶飲み時間に提供
した話題であるが、一番カッコいい終わ
り方の論文はどれかというもの。当時(26
号位まで)の私の一推しは11号藤尾論文。
「そこでは国家方針・体制と信仰価値がい
よいよ癒着し、道理に信仰的粉飾をこら
して組織は律動していく」という結びだ
が、「どひや、これはちよつとカッコよ
すぎるでえ」と思ったものである。ミ
ハー的ながら、論文の結びの一文にも研
究者のこだわりが見てとれるということ
ですか。

その④。所に在職したことで、研究所は
どんな所か説明するような機会がごくだ
まにあつたりする。そんな時私が好んで
使つたのは「研究所とは次年度の実施計
画会議の時、朝、玄関の掃除を誰がする
か(つまり助手がすべきものと決まってい
はずだと)延々話し合っているようなそ
んな所です」という喩え話である。

「在職当時の思い出」と聞かれて思
い出すのは、こんなことばかりである。
(元助手)



新任職員紹介

事務室 金光未来子 (岡山・本部)



昨年一月一日付で、本所書記に就任した金光さんは、金光学園中・高等学校で学び、六年間吹奏楽部に所属した。専門学校では保育士の資格を取得。また、パン屋でアルバイトをした経験を持ち、「食・パンをスライズすることにだけは誰にも負けない」とのこと。

趣味は土いじり。特に、無心になれる草抜きが大好き。誰にも見向きもされない本所の花壇を綺麗にするのが目下の目標とか。家に帰れば、今年四歳になる子供のママでもある金光さんは、健康に対する関心が強く、「日本人はお米！牛乳は嗜好品のひとつ！」が信条で、毎日の御用には

必ずお握りを持参。「神様のおられる天地、神様が下さった身体を汚すのは勿体ない」と家庭では自然食品にこだわり、食品添加物をなるべく摂らない、洗濯には合成洗剤を使用しないという。
「以前、姉が本所で御用していた関係もあり、ご縁の深さを感じる。まだまだ分からないことも多いが、一つずつ学び、小さなことでもお役に立てる人間になりたい」と抱負を語る。

▼人事異動▲



- 一、職員(教団職員)
 - 書記竹中梢、6月1日付主事に任命、同日付資料室員に指名。○助手池田道男、6月16日付辞任。○助手荒垣寧範、9月8日死亡により退職○助手秦修一、11月1日付所員に任命。○教徒金光未来子、12月1日付書記に任命。○主事宮内真美子、12月20日付辞任○部長大林浩治、3月18日任期満了。翌日付再任。○所員秦修一、4月20日付辞任。
 - 二、研究生
 - 研究生小野田淳之、7月31日付解嘱。
 - 教師奥林慎、11月6日付研究生を委嘱、3月31日委嘱期間満了。
 - 教徒堀貴秋、同高阪有人、同佐田與一郎、5月1日付研究生を委嘱。
 - 三、嘱託
 - 嘱託高橋一邦、同坂本忠次、同荒木美智雄、同姫野教善、同山崎達彦、同藤尾節昭、同前田祝一、同早川公明、同河井信吉、同宮本要太郎、7月21日任期満了。
 - 輔教坂本忠次、教徒荒木美智雄、教師姫野教善、教徒山崎達彦、同前田祝一、教師早川公明、同河井信吉、輔教官本要太郎、翌日付再度委嘱。嘱託佐藤光俊、9

月10日付解嘱。

四、研究員

- 研究員岡成敏正、9月10日付解嘱。教師岩崎道興、9月11日付研究員を委嘱。
- 五、評議員
 - 評議員岡勝繁、4月19日付辞任。○教師岩本世輝雄、5月10日付任命。○評議員早川公明、6月19日任期満了、翌日付再任。○評議員安武道義、8月31日任期満了、翌日付再任。○評議員森田光照、2月9日任期満了、翌日付再任。

◆おめでた◆



- ☆結婚
 - 助手佐藤道文は11月27日、堀尾郁江さん(大分・日田)と結婚。
- ★出産
 - 助手岩崎繁之・沙弥香夫妻に6月29日、長男敏朝ちゃん誕生。
 - 所員秦修一・美緒子夫妻に3月16日、長男響ちゃん誕生。



※「聖ヶ丘27号」正誤
○人事異動記事にて、評議員岩本世輝雄先生の名前が世喜雄となっていました。ここにお詫びを申し上げますと共に訂正いたします。

SAKAMICHI



今年も『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。原稿を執筆して下さった方々には御礼を申し上げます。最近の研究所のトピックスを一つ紹介します。

○去る一月二十九日から二月八日にかけて、植木職人さん数人により、教学研究所周辺の庭の手入れが実施された。所管部の説明では、「この度の剪定は参拝者の方が研究所や学院の方へ行かれることがあるため、気持ちよく参拝していただきたいとの願いの元を実施した」とのことである。

ここしばらくは、九月に職員全員による草刈りや剪定作業を実施してきた。剪定については素人なので、なかなか植木は思うような形にならない。悪戦苦闘するも、考えていたような形とは全く変わってしまった、がっくりとくる。

それに比べ、今回の職人さんの剪定作業を見ていて思われたのは、やはりプロだなあとということ。仕事が早い。十数年間手入れされなかったにも拘わらず、みるみるうちに庭の形になっていく。このような庭であったのかと再認識し、感嘆も一入であった。大胆にバツサリと切られ、大丈夫かと思われた木々もあつた。しかし、新緑の時期を迎え、元気に新芽が吹いている。

客殿東側のキャンプ場に降りていく通路も、剪定、伐採等の手入れがなされた。これまで木々が覆い茂って通行もままならない状態であったのが、きれいに整えられた。そして、見えなかった客殿基礎の石組みまで見えるようになった。

今後は二年ごとに手入れが実施されるとのことであるが、我々もこの景観を大切にしたい。



発行・印刷 金光教学研究研究所

岡山県浅口市金光町大谷 四四一之三
電話 (〇八六五) 四二一三二一七
FAX (〇八六五) 四二一三二一九